

また、児童の自己評価力がどの程度高まつたかを見るために、教師の評価と児童の自己評価とのずれを比較してみると、はじめは自分の動きを教師の評価より過大に評価する傾向が強かつたが、学習が進むにつれてその差が少なくなってきた。このことは、自分の動きが高まるにつれ、動きを見る目が育ち、動きを正しく評価する力も高まつたためと言える。

(2) 自己評価と動きづくりのつながり

自己評価がいかに動きづくりに生かされていたか、前時の反省と次時のめあてのつながりについて調べてみた。その結果、半数以上の児童が前時の自己評価の内容を次の動きづくりに生かしていた。

(3) 自己評価力を高める手立て

事後の児童作文には、「VTRで見ると、自分でやついて下手かなと思つたことが上手だつたり、これは上手だなと思う動きが変になつたりした」とか「動きづくりのポイントはものすごく役に立つた。自分が悪いところがすぐにわかるからだ」など様々な記述があつた。これは、VTRにより自分の動きを正確につかみ、それを動きづくりのポイントカードと組み合わせることにより、自己評価に大変役立つたことを物語つているよう思われる。

(2) 相互評価力の変容

児童の表現力の高まりを、動きのポイント毎に○○△×で評価したことの変容を見てみると、実践一では、特に表情と手、足の動きの伸びが著しかつた。一方実践二では、鋭い瞬發的な動きに限定し、部位毎の評価

「グループの動きづくりカード」の中から相互評価練習法の選択回数を見ると、動きができるあがるにつれ相互評価を多用するようになった。

また、動きづくりの中で、相手の動きに対するアドバイスも増えてきている。動きを見る目が育ち、相互評価の楽しさを感じて意欲的に発表していたことがうかがえる。

(3) 教師の評価

教師のアドバイスが動きづくりに直接役に立つたという児童の数は少しずつ増えていった。これは、毎時間のVTR分析により、一人ひとりの動きをしっかりと把握して授業に望んだ成果と言える。また、児童の教師からの支援に対する反応を見ると、学習が進み、自分の動きができるあがつていくにつれ、アドバイスをそのまま受け入れるのではなく、自分の考えを述べる児童が増えた。これらは、動きに対する自分なりの考え方をしつかり持つようになってきたためで、主体的に学習に取り組んでいたと言える。

3 身体表現力の変容について

児童の表現力の高まりを、動きのポイント毎に○○△×で評価したことの変容を見てみると、実践一では、特に表情と手、足の動きの伸びが著しかつた。一方実践二では、鋭い瞬發的な動きに限定し、部位毎の評価

をしたため、児童にもポイントがつかみやすかつたと見えて実践一より◎の評価が多かつた。

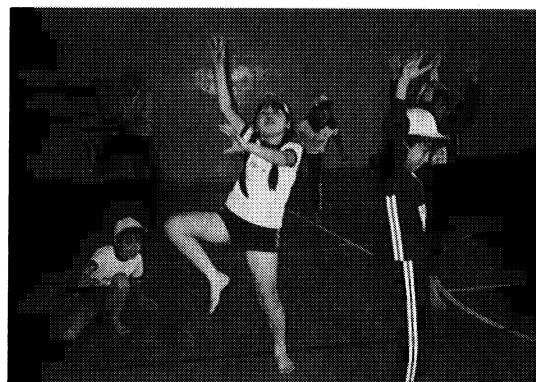
五 研究の成果と課題

したグループ表現ができた。

- 動きづくりのポイントを与えると、自由に動きをイメージするよりも、動きの高まりが早い。
- 実際に動いてから表現題を設定すると、自由に動きをイメージする。
- 見るポイントをしつかりつかませ、相手の動きを見る時間を十分に確保することにより、相互評価を活用して動きづくりをする姿が増え、評価力も向上した。

○ 教師側も、VTRで児童の動きをじっくり見て、一人ひとりの動きを細かく把握し、また、動きについて児童との話し合いを十分に確保したことにより、その子なりのイメージに踏み込んだ動きの支援ができた。

○ 本研究では、児童のイメージがたくさん出されたが、その中でも動きにつながるイメージをどうとらえ、どう引き出すか、今後より効果的で具体的な指導を通して明確にする。



2 今後の課題

- ポイントの吟味と効果的な相互評価形態の工夫に努めるとともに、教師の支援評価における情意面の把握と、個のイメージに応じた動きの支援のあり方をさらに検討していく。